

海の危険な生物とのつきあい方



素潜りによる海中観察

はじめに

私は主として海や水辺で活動を実施している大学教員です。おもな活動種目として、スノーケリングや素潜り、SCUBAダイビングなど海に棲む生物の観察を目的としたもの、カヤックやセーリングなどの海を渡ることを目的としたものがあります。海で活動する際には、ドキドキ感やワクワクする感覚がありますね。未知の世界に出会うことや、私たちの祖先の歴史に学ぶことから生じている感覚ではないでしょうか。本稿では、海での活動を30年ほど実施してきた中で感じた海の生き物に関連する危険やそれに対する考え方・対処方法について紹介します。

海での体験

海と人間のかかわりを歴史的に振り返ると、人間が水という環境に対する恐怖心を克服し、その活動範囲を拡大させたことが認められます。「海の中のタンパク質を食べる」、「海を渡って知らない土地へ向かう」といった行動の中では、先人たちが工夫を重ねて試行錯誤したことが予想され、試行錯誤の結果が現在の私たちの知識・知恵や行動技術、道具の開発などに繋がっています。海は人間が活用してきたものでもありますが、さらにそれ以前から生息してきた我々の祖先とも言うべき海洋生物の棲家・領域でもあることを忘れてはなりません。

そのような意識を持ったうえで、海の生き物に関する知識を得る（知る）、あるいは自分が活動しようとする地域特有の海洋環境に関する情報を得ることが重要であり、さらには地域特有の環境をよく知る人とともに行動するようにすることが危険を回避して安全に行動するためには重要です。安全と環境保全に配慮した行動をとるようにし、事故やケガの対処法についての知識を得ておくことや救急法・対処法について準備・トレーニングをし

ておくといよいでしょう。

さて、私自身の経験では、ダイビングのトレーニングで初心者を対象に講習していた際に、ガンガゼと呼ばれるウニに触れてしまい、その針が指の中に折れて残り、痛みと腫れが生じたことがあります。これは、慌てた初心者をその場で落ち着かせようとしてその方の身体を安定させるために支え、もう片方の手でよく確認せずに岩のくぼみを握ったことから生じています。確認不足や知識・体験の不足はこのような事態を招く可能性があります。

また、海中に落ちていた空き缶を拾って陸上へ帰ってきた際に、空き缶を住処にしていたフタホシニジギンポという10cmに満たないサイズの魚が出てきました。海に帰してあげようと手ですくって歩いていたところ、小さな口でガブリと噛みつかれました。皮膚が3mmほど切れて、肉がはみ出てきました。人間がごみだと勝手に決めつけている空き缶から海に帰してあげようというように、人間が良かれと思って行っていることですが、これは、その魚にしてみれば、死ぬかもしれない一大事だったのでしょう。海の生物に対する驕り（おごり）を持ってはいけないことを感じさせてくれる出来事でした。



フタホシニジギンポ (出典: WEB魚図鑑 <https://zukan.com/fish/internal3443>)



海を渡る (サバニ)

トリアスロンのレースで泳いでいた際には、前方からクラゲの触手が流れてきて運悪く鱧(まぶた)の上に張り付いてしまい、レース中に鱧が腫れ上がったこともあります。

このほか、釣り上げた魚(ゴンズイ)の針を外そうとしたとき、毒のある鋭い背びれと胸びれで刺されて、指が腫れ上がった経験もあります。知らないということは恐ろしいことです。

また、裸足で海水浴中に何かを踏んで、足の指が腫れ上がった経験もあります。おそらくハオコゼなどのオコゼの仲間を踏んだのだらうと思います。

これらの事例ではいずれも命にかかわるような大事には至っていませんが、海洋生物に関する知識が不足していたことや、海で活動するための服装や装備が十分でなかったことに加え、海に生息する生物への配慮が足りなかったことが原因となって生じたものと考えられます。

研究発表されている症例報告や事例を参照すると、海水浴中にゾエア(海洋生物の幼生)による皮膚炎が発生していることを知ることができます。目に見えるものだけが、危険な対象とは限らないことも示しています。

さて、「海」と言っても、東京湾や大阪湾のような都会に近い場所にある海と、例えば南西諸島にある無人島周辺の海では、その自然度が違います。しかし、自然度が違うからと言って、都会に近いところが安全であるとは言いきれません。生き物が棲むことのできる環境には、その環境に適応して棲んでいる生き物がいるということを忘れてはいけません。また、海は繋がっていますから、人間にとって危険な生き物が絶対ないとは言いきれません。

世界中の海では、映画のJAWSに代表されるサメの仲間による被害が報告されています。潜水士やサーファーがシャークアタックを受けたという事故は、インターネットで検索するとその記事を読むことができ、動画も見ることができます。サーフィンコンテストの途中でサメのアタックを受け、生還した例もあります。私自身は海洋での2000回を超えるダイビングを実施してきましたが、自分の身長を超えると思われるサイズのサメに遭遇したことはほとんどありません。遠くにその影を見たら、ゆっくりとその場を立ち去るようにしてきました。確率からみると、人を襲うようなサメに遭遇する確率は非常に低いものだと考えることができます。

危険な生き物の情報

以下には、危険な海洋生物に関する情報をあげてみます。海に行くときは、危険生物に関する書籍やウェブサイトなどで知識を得てから、海に近づくようにしてほしいものです。

クラゲの仲間: 遊泳能力は低いが、強力な毒を持つ種類も生息している。生息・発生海域では皮膚の露出を控える。ハブクラゲやカツオノエボシは強烈な毒を持つ。

ウミヘビ: サンゴ礁域に生息する。毒性は神経毒で、咬まれて死亡した事例もある。

アンボイナ貝: イモガイの一種で、毒矢を持つ。毒性が高く、全身麻痺などを生じさせ、死亡例もある。

ヒョウモンダコ: 神経毒を持つ小型のタコであり、咬まれたことによる死亡例もある。

オコゼ: ヒレに毒を持つ種類がある。背びれにタンパク毒を持つオニダルマオコゼによる死亡例もある。

ウバケイソギンチャク: サンゴ礁域に生息するイソギンチャクの一種。触れて激痛に襲われ、重症化した事例もある。

ウニ: ラップウニなど棘に猛毒を持つものもあり、刺されると激しく痛み、重症になった事例もある。

オニヒトデ: ヒトデの仲間であるが、触れると激痛に襲われ、強烈な炎症に至る。傷口が化膿しやすく壊死を起こす場合もある。

このほか、死亡や重症には至らないものや、食べたなら危険という生き物がいます。緊急時には救急隊等に連絡をして、速やかに医師の診察や処置を受けるようにします。また、携帯品や一般医薬品は以下のようなものを海辺に持参することが推奨されます。

- ・ 消毒用アルコール
- ・ 解熱用の氷
- ・ 解毒用の重曹、食塩水、食酢、ポットに入れたお湯
- ・ 外傷用の抗ヒスタミン剤
- ・ 洗眼用の精製水、ホウ酸
- ・ 消毒綿、ピンセット、ハサミ、三角巾、毛抜き

おわりに

私たちは、どちらかと言うと大自然というよりは都会化された環境で暮らしています。クーラーや暖房器具、トイレ、水道、電気など便利なものを使えることが当たり前な世の中です。便利で安全・安心なところから一歩踏み出して自然に近づこうとする野外活動を実施する際には、都会で飼いならされた人間のなかに潜む「野性」を磨く必要がありそうです。



千足 耕一 CHIASHI Kouichi

東京海洋大学海洋政策文化学科 教授

1966年4月神戸市生まれ。現職:東京海洋大学海洋政策文化学科教授(博士・医学:東邦大学)。専門分野:海洋スポーツ・レクリエーション。著書には「水辺の野外教育」(杏林書院)や「スキューバダイビング・セーフティ」(成山堂)ほか。海洋での身体活動に関する研究活動と教育活動を実施している。